第37回　日文研フォーラム

■

日本語の起源

―日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る―

The Origin of the Japanese Language

In Search of the Relationship Between Japanese and Korean Languages as well as Ancient Chinese Bone and Tortoise-Shell Inscriptions

■

辛　容　泰
Shin Yong-tae

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長　梅原　猛

● テーマ ●

日本語の起源

― 日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る ―

The Origin of the Japanese Language
In Search of the Relationship Between Japanese and Korean Languages as well as Ancient Chinese Bone and Tortoise-Shell Inscriptions

● 発表者 ●

辛　容　泰
Shin Yong-tae

発表者紹介

辛　容　泰
Shin Yong - tae

韓国・東国大学校文科大学日語日文学科教授

1934年生まれ。1958年、釜山師範学校卒業。1972年、国際大学日語日文学科卒業。1974年、韓国外国語大学大学院より、「長明・兼好の文学思想の比較研究」で碩士号（修士号）を取得。1975—79年、釜山女子大学専任講師、1979—82年、国際大学助教授。1982年より同大学副教授をへて現在、同大学校文科大学日語日文学科教授。専門分野は韓日古代語学。1990年12月、国際交流基金フェローとして来日、1991年12月まで国際日本文化研究センターの外国人来訪研究員として「万葉集における古代日本語の研究」をおこなう。

主な著作:

「韓国漢字音の母胎に関する考察」国際大学論文集8（1980）
「高句麗の地名に残る日本語の数詞」『月刊言語』15周年記念号（1987）
「原始韓日語の研究」東国大学出版部（1988）
「古代日本語・韓国語の研究」明治書院発刊予定（1991）

序にかえて

我々は、ここ一世紀、日本語が世界中のどの言語と同系なのか、その起源はどこにあるのかについて追究してきた。しかしながら、世界の多くの言語が、日本語の同系語を求めるために比較されてきたが、何の定説を見ぬまま漂流されているのが今日の日本語の状況である。

では、このような状況に至った原因は一体どこにあるのか、それについては、様々な原因があると思われるが、卑見では、何よりも日本語と比較される言語の深い研究が行われていないのが主な原因であろうと思われる。それに日本語自体の研究においても、単語の類型論的な観点から見る、単語族の研究が余り行っていないこともひとつの原因になるであろう。

ということで、これからの研究は、古い時代の日本語及び、比較される相手の言語の単語族についての徹底的な研究を行うべきであろうと筆者は信じる。

このような見解を念頭において、日本語の起源を辿るあらゆる方向から、先ず、日本語の数詞と一致されている高句麗語との関係、それに朔って、昔、高句麗語と関係があろうと思われる甲骨文（中国の東北部の渤海湾周辺に長らく生活しながら絵文字、象形文字、甲骨文等を創製した部族の言語）との脈絡を探るのが本

論の主な課題である。

卑見では、この日本列島に初めて渡来されたのは南洋諸島の部族であろうと思われる。つまり、風等の影響でこの列島に漂着されたのであろう。いわゆる〝倭人〟という部族は、この部類であり、主に、魚類を主食とする部族である。

しかし、その後、日本の弥生時代以前から、この日本列島に多数の集団が絶え間なく渡来されてきたのは周知の通り、北方の大陸の部族である。この部族等は、紀元前遥か以前から天災、或いは人災によって東南の朝鮮半島に移住し、又、朝鮮半島の内部にも同じことが起こって、終には、この日本列島にまで追い詰められたのであろう。

昔の移住の主な原因は、人災で、例えば、部族との争いで、負けると、必死的に逃亡しなければならない。捕えると、殺されるか、奴隷として一生を終えなければならないからである。例えば、〝民〟は、鋭い針のようなものに目玉を刺された盲の奴隷を表す象形文字である。従って、〝民〟の系列字である〝眠〟も目を閉じていることを表している。又、〝衆〟という字は、太陽が照っている農場で三人の奴隷が働いている模様を表している象形文字である。このような奴隷たちは、主に、政治を司っている側に反対した勢力で、捕らえて死ぬまで労働力に利

用されたのである。

このような極限状況であるから争いに負けた集団は、必死的に逃亡せざるを得ない。黄河下流地帯、渤海湾周辺には様々な部族が割拠し、勢力争いが絶え間なく続けられたと思われるが、やがて、B・C 一五〇〇年頃、この部族等を統一し、始めて近代国家的な国を築き上げたのは、周知の通り、〝商〟である。商王朝は、約四〇〇年間続くのであるが、従来の〝絵文字〟を発達させ、王朝の占いを始め、様々な行事の記録に利用して、それを亀の甲や獣の骨に刻んで後世に残した。これが、かの有名な甲骨文である。

昔も今も人間集団の間では絶え間なく紛争がある。筆者の推定では、商王朝が誕生するとき、相当な部族間の紛争があったのではないかと思われる。それで、争いに負けて逃亡する人間は、主にその部族の上位階級の貴族たちであろう。

商王朝の独裁は歴史的にも有名であるが、特に、商王朝の末の王である王の横暴は、商王朝の滅亡を促すことになった。有名な〝酒池肉林〟という話は、この王の横暴に関する話である。国民に酒を醸させ、全国の美人を集め。真っ裸かにさせて、宴会を開く。この宴会では、商王朝に背いた民を次々と、火を焚いて真っ赤になっている釜の中に突っ込み、国民にその恐怖感を感じさせる。

このような商王朝の独裁の政治に耐えかねて、終には、朝鮮半島等に逃げこんできた商の国民も少なくないと思われる。以後、国民に背を向けられた商王朝は、商王朝の一地方藩に過ぎない周に滅亡されたのであるが、このときも相当な商王朝の王族、貴族らが、今の中国の東部、或いは朝鮮半島に逃げ込んできたと思われる。今日、商売をしている人を〝商人〟というが、その由来は、その昔、商王朝の滅亡によって、逃げてきた商の国の人たちがあちこち流浪生活をしながら、地方の特産物の物物交換の役割をしたことで、その名が今日に及んでいるのである。

以後、中国大陸では、数世紀間、戦乱が続くあいだにもどんどん逃げ込んできたことは、中国関係の史書にも記録されている。

以上のような人災、その他の天災らによって、紀元前何千年前から、黄河下流地帯及び、渤海湾周辺に長らく根拠し、生活してきた部族が朝鮮半島に流れ込み、その一部が又、日本列島に渡来されて、今日の日本文化の基礎を築き上げたと思われる。従って、この人類の移動に沿って、当然、その言語も日本語の中の一言語として残存されていることは疑いない事実であろう。

以上のような見解から、筆者の日本語の起源に関する研究は、先ず、古代の日

本語の単語族を集め、それに、中国東北部、朝鮮半島に割拠した高句麗・百済・新羅の言語ら、これらに脈絡されると思われる黄河下流地帯、渤海湾周辺の部族の言語（甲骨文）らを合わせて総合的に考察してみようというのが筆者の研究方法である。そして、このような研究がどんどん積み重なっていくと、終には、日本語の起源が自然に浮き上がってくると思われる。

従来の日本語の系統論に関する研究は、このような研究が乏しいというのが、筆者の見解であり、今後の日本語の起源に関する研究は、その方向をどちらに向けるにしろ、徹底的な単語族の研究を行うべきであると信じ、次に、その一例を挙げてみることにする。

日本語の〝カヒ〟（峡・甲斐）について

三国史記、高句麗の地名に、

海口郡、本高句麗穴口郡（穴口郡一云甲比古次）

と言う記事がある。

ここで、〝（穴口郡一云甲比古次）〟という記事が、たいへん示唆的で、つまり、高句麗語で、〝穴口〟を〝甲比古次〟と読まれたと言うことを、密かに表してい

るのであるが、これを、もう少し、詳しく解いて見ると、高句麗語で、〃穴〃を〃甲比〃と言い、〃口〃を〃古次〃と言われたことを表しているが、これについては、後述に譲ることにする。

一方、又、三国史記、高句麗の地名に、

穴城、本甲忽・

と言う記事があるが、この地名の所在は、同じく、三国史記、巻三十七、高句麗の地名の、〃鴨緑水以北地名〃という記事によって、伺われるのであるが、ここは、高句麗が、半島に南下する前の地域で、今日の中国の東北部、所謂、満洲のどこかであろう。この記事によれば、南下する前の時期には、〃穴〃を、〃甲〃と読まれたことがわかる。

以上を、まとめて見ると、高句麗語で、〃穴〃を〃甲〃乃至〃甲比〃と言われたことが察知されるであろう。さて、この〃穴〃を高句麗語で、何と呼ばれたかを伺うに、この〃甲〃の字の再構音を調べて見よう。

甲:kap（Tung，T' ung－ho。Tと、称す。以下、同じ）・kap（Karlgren。Kと、称す。以下、同じ）1）

これを見ると、〃穴〃を、高句麗語で、'kap' 乃至 'kap' と言われたことがわか

る。'a' と 'ɑ' の差は、前者が、中舌母音、後者が、奥舌母音という差異だけで、あまり、その格差がないようである。

一方、〃比〃の再構音を調べて見よう。

比 :pied (T) • pier (K)

であるが、以上をまとめて見ると、甲は、'kap' 乃至 'kap'、甲比は、'kap—pied' 乃至 'kap' —pier' の如く読まれるようである。

一方、日本語では、〃ヤマガヒ〃（山峡）とか、〃マナガヒ〃（眼間）という言葉があって、この〃カヒ〃という言葉の意味は、或る事物の〃アイダ〃を表している。例えば、〃ヤマガヒ〃（山挟）は、山と山との〃アイダ〃、即ち、谷間を指しており、〃マナガヒ〃は、眼と眼との〃アイダ〃を意味している。つまり、〃中間〃〃半ば〃という意味を表す言葉であろう。すると、前述の、高句麗語の、'kap' (kap) 乃至 'kap—pied (kap—pier)' は、〃穴〃を意味しているが、この〃穴〃は、洞窟のような〃穴〃ばかりではなく、山と山との〃アイダ〃（間）、つまり、〃山挟〃（谷間）を表しているのであろう。

さて、又、この、高句麗語の、'kap—pier' という言葉が〃中間〃という意味を表す言葉であることを裏づける、次のような記事がある。

三国史記、新羅儒理王、九年条に、

王既定六部中　分為二　使王女二人　各部内女子分朋造党　自秋七月既望（中略）…至八月十五日　考功之多少　負者置酒食　以謝勝者相与　歌舞百戯皆作謂之嘉俳。

とある。この〃嘉俳〃という言葉は、陰暦の八月十五日を指しているが、なぜ八月十五日を‘嘉俳〃と称したかが、問題の焦点である。

中期韓国語で、陰暦の八月十五日を‘kapai’（嘉俳）と呼ばれたことと、高句麗語で、〃穴〃（谷間）を‘kap—pier’と呼ばれたのを比較して見ると、何らかの関連があるようである。

結局、〃嘉俳〃という言葉は、八月十五日を指す言葉ではなく、〃十五日〃を指しているようである。それは、十五日が、ちょうど、月の〃中間〃であることで、〃嘉俳〃と表したのである。

一方、中期韓国語で、中間を、‘kap—an—tai’というが、これを分析して見ると、‘kap’は、〃中間〃を表しており、‘an’は、接尾詞、‘tai’は、場所を表す名詞である。即ち、〃中間の場所〃という意味を表している。慶尚道方言では、この〃中間〃を‘kap—un—tei’という。又、韓国の済州島方言に、〃筋・境界・分別（両方

に分ける）〃を表す語、'kap'という名詞があり、2）中期韓国語に、'kap—ta'という動詞があって、この動詞は、穴のような地形に、〃水が溜まる〃という意味を表している。今日では、'k oi-t a'に変化されている。

以上をまとめて見ると、この、'kap'乃至'kap'という言葉は、十五日、つまり、月の〃中間〃、〃筋・境界・分別〃という名詞と、穴のような地形に、〃水が溜まる〃という動詞として、使われているのが察知される。これらの中で、その基本義は、勿論、〃中間〃であり、この中間というのが、両物体の〃境界線・筋〃として、派生され、又、〃中間〃とか、〃境界〃は、両物体の分け目の位置にあることで、〃分別〃という意味に派生されたのであろう。又、〃水が溜まる〃という動詞は、高句麗語で、穴を表す名詞、'kap（kap）'が動詞化されて、その〃穴〃に、水が〃溜まる〃という、新しい派生語を生み出したように見える。

以上を総合的にまとめて見ると、日本語では、〃中間〃を意味する名詞、〃カヒ〃（間・峡）があり、高句麗語には、〃穴・谷間〃を表す語があり、中期韓国語、その他の韓国語の諸方言では、〃穴・谷間・中間・筋・境界・分別〃という意味を表す名詞があり、穴に、水が〃溜まる〃という意味を表す動詞が使われているのが伺われる。

次は、以上のような、韓国語及び、日本語の単語群と、何らか、脈絡があろうと思われる甲骨文字の単語群を挙げてみよう。

〃間に挟む〃とか、〃はさまる（中間）〃という意味を表す単語群として、

夾：kɐp（T）・kap（K）・kap（A）

侠・挟：riąp（T）・giąp（K）・ɦäp（A）

峡・狭：ɦăp（A）

等がある。

先ず、〃夾〃は、ひとりの大人が、ふたりの子供にはさまれていることを表す会意文字である。従って、この文字は、〃あいだに挟む〃とか、〃中間にはさまる〃という基本義を表している。例えば、〃峡〃は、山間に挟まれている〃谷〃を表し、〃侠〃は、家系にはさまれている親分を意味し、〃挟〃は、胴体と腕に挟まれている空間を意味している。又、〃狭〃は、物に挟まれている狭い〃空間〃を表し、〃鋏〃は、V型の模様の、両方の刃物に挟まれている空間がある器物を表している。又、〃莢〃は、二枚の外皮で、実を挟んでいる豆を表しているが、左右にある二枚の外皮は、V字形を成していて、両物体に挟まれている空間ということを表している。

一方、日本語の〝ほお〟に当たる字、〝頬〟は、〝夾〟＋頁の会意文字であるが、この文字の成り立ちから見る場合、この〝頬〟という文字は、〝ほお〟を表しているというよりも、〝顔〟を表しているのではないかと思われる。

というのは、この〝頬〟は、具体的には、鼻の下にある、溝のように窪んでいる正中線を指しているのであるが、〝顔〟という形態をよく見ると、〝顔〟は、この正中線を中にして、その両側に、顔の中に存在されているあらゆる物体が、左右対称的に並んでいるのが見られる。それで、この正中線の溝線は、両側に膨らんでいる頬に挟まれているのが見られる。

それに、又、日本語の'kaf-o'（かほ）という名称を見よう。この'kaf-o'を溯る場合、その原形は、例えば、日本語の'f'を溯る場合、'p'であろうというの定説になっていることで、'kap-o'と仮定することができるであろう。もし、この'kap-o'が容認されるならば、前述の、高句麗語の、〝穴〟を表す語、'kap（甲）'、又、甲骨文字の、挟まることを表す語、'kap'（夾）とは、音義両面において酷似しているように見える。

このように考えて見ると、日本語の'kaf-o'（かほ）という名称も、この単語群の一群ではないかと思われるが、もう少し考察を要するであろう。

以上、日本語の'kaf-i'（峡・中間）と、高句麗語の'kap'（穴）・kap-pier（穴）、韓国語の〝十五日〟を表す語、'kap-ɐi'（嘉俳）、又、中期韓語の中間を表す語、'kapɐn-tɐi'の'kap-'、窪んでいるところに、水が溜まることを表す動詞、'kɐp-ta'等、その脈絡が明確に見えるようである。

一）周法高（一九七八）、漢字古今音彙、中文大学出版社、香港、該当再構音参照。

二）玄容駿（一九八〇）、済州道巫俗事典、三、四六頁等、玄平孝（一九六一）、済州島方言研究、精研社、二四頁等、参照。

その外、李南徳（一九八五）韓国語語源研究Ⅰ。梨花大出版部、三〇～三二頁にも触れている。

日本語の'kuma'（熊）の名称について

日本語の、この〝クマ〟という名称は、早くから、韓国語の'kom'（熊）と比較されている単語であるが、一方、動物の名称としても、割合、古い時代の文献に記録されている名称である。

例えば、「三国遺事」古朝鮮の記録にある、〝檀君神話〟の熊女の話とか、ある

いは、「三国史記」地理志に出ている、今日の公州の古地名である、熊州らが、それである。

日本語の、この'kuma'という名称は、一体、どこから来たのかと言うことを、これから、序序に、考えて見よう。

前述の、檀君神話の熊女の話は、この名称の起源を考えるに、かなり、参考になろうと思われ、その話を、ちょっと、登場させて見よう。

その話は、天孫である桓因の息子の〃桓雄〃が、太白山の檀木下に降臨した時、熊と虎が、その前に現れ、人間の女に化身されるよう訴えた。桓雄は、この訴えを受入れながら、その条件として、

〃洞窟の中で、百日間、日光を見ないで過ごせよ〃

と言い、これを、是非、守ることを強調した。

しかし、結果的に、虎は、これを破り、熊は守って、女人になり、桓雄と結婚した。この二人の中から生まれたのが、古朝鮮の始祖、檀君である。

この神話に登場する、二人の対象は何かを象徴しているようである。「桓雄は、天孫、つまり、太陽の子孫であるから、〃光〃である。従って、それの配匹になるためには〃陰（暗黒）〃でなければならない。」ということを、秘かに暗示して

いるのである。言い換えれば、〝光明〟と〝暗黒〟の相対性と言えよう。

一方、『三国史記』巻三十六に、

熊州、本百済旧都、神文王改為熊州。

とあり、又、近世朝鮮朝の初期に編纂された『龍飛御天歌』には、この熊州（熊津）を'koma-nara'と記録されており、『日本書紀』には、〝久麻奴利〟（kuma-nuri）と書いてあるのが見られる。

この記録を見てもわかるように、〝熊〟を、近世朝鮮朝の記録では、'koma'、日本では、'kuma'と称している。

この川は、今日の忠清南道の公州の公山城の後方（北側）に流れている川で、公山城は百済の政治の地所である。結局、この川を'koma-nara'と言うのは、この治所の〝後方（北方陰側）〟〝（koma）〟の〝川（nara）〟という意味を表していることがわかる。

一方、韓国語に、〝暗黒〟の意味を表す語、'kam・kem・kom・kum・kümu'があり、又、晦日を'kümüm'と言うが、これは、〝暗黒の日〟（月光のない日）であることを物語っている。

又、咸鏡道と平安道の半ばを貫通している、赴戦嶺山脈の北側にある高原を

〝蓋馬〟（kab-mwag）3）と言うが、これは、'kama' 即ち、〝陰地〟を表しているようである。

鳥類にも、黒色を表す、このような名称が反映されているようである。例えば、烏を'kama—kwi' と言うが、'kwi' は、よく、動物の名称の語尾につく、名詞の語尾であり、'kama' は、黒色を表している。その他、'kama—ori'（黒鴨）の'kama' など。

日本語では、黒色を表す語に、'kum—' 系と、'kur—' 系があるようで、例えば、'kum—' 系は、'kum—o（雲）・kum—u（雲一鯛部・隠）等、'kur—' 系は、'kur—o（黒）・kur—a（暗）・kur—e（暮）等がそれである。

Kur—' 系は、後考に譲ることにして、

結局、日本語の'kum—a（熊）と言う名称は、正に、この〝黒色〟を表す、'ku—' 系のクループの一族として、名づけられた名称ではなかろうかと、思われるのである一方、韓国語の'kom'（熊）とは、当然、同源であろうことは、以上の考察で、十分察知されるであろう。

最後に、この〝熊〟という上古漢語の上古音について調べて見よう。

B。karlgrenの上古音の再構音を見ると、gium 4）と、再構されてある。これは、実に、注目に値する。日本語の‘kuma’と酷似されていることがわかる。この上古音が、中古音に至っては、‘jiung’に変化されるが、この韻尾の変化は、上古漢語の侵部が、魏晋南北朝時代に至って、侵部と冬（東）部に分離され、韻尾が、‘-m’である、〃熊・風〃 等の字音は、東部に所属されて、‘—ng’に変わったことが、中国語音韻論の諸研究で確認されている。5）

ここで、この‘gium’（熊）という言葉は、どこの言語であるかが問題になる。上古漢語であろうか、或いは、中国の歴史書で言われている、所謂、〃東夷〃の言語であろうか、或いは、その他の第三者の言語であろうか。今のところ、この問題の明解は、多少、無理ではないかと思われるが、しかし、この〃熊〃字が、象形文字であるから、少なくとも、周秦以前の、夏商（殷）時代の言語であろうことは、推して考えられると思われる。

日本語の‘kuma’（熊）、韓国語の‘kome’（熊）という言葉は、実に、古い言語と言えよう。筆者は、日本語の、この‘kuma’（熊）のような、このような古い言語が、数多く潜められていると信じ、考察を進めている。

日本語の'kuma'は、韓国語の'koma'（熊）よりも、もっと古い言葉であることが、この考察でも伺われるが、このように、単語によっては、日本語の方が、古いのがあると言うことは、方言周圏説の如く、島と言う環境の影響であろう。

三）・四）周法高、編（一九七五）、漢字古今音彙、中文大出版社、香港。董同禾・B。karlgren等の該当の再構音参照。

五）丁邦新（一九七五：二四七）魏普音韻研究、中央研、歴言研、台北。その他、厳学君（一九八四）、周泰古音結構体系（稿）、音韻学研究、中国音韻学研究会、北京。に、侵部唇音或圓唇舌根音声母可使＊ə変u同時又由異化作用使韻尾＊－ngと述べている。等、参照。

日本語の'kuru-'（回転・囲い）について

日本語において、'kuru—ma'（車）とか、'kuru—wa'（廓）と言う、'kuru—'が表す基本的意味は、〃回転・囲い〃であろう。

日本語で、例えば、〃クルクル〃とか、〃グルグル〃と言う、回ることを表す擬声語も、この単語族であろうと思われるが、本考は、この〃回転・囲い〃を表

す‘kuru—’と言う単語群が、どのような言語と関わりがあるのかと言うことを追究して見たいと思う。

先ず、韓国語では、回転することを表す語、‘kurï－ta’と言う動詞があって、上述の日本語の回転を表す語、‘kuru—’或いは、〝クルクル（グルグル）〟とは、恐らく、同源であろうと思われるが、その他、蒙古語の、〝囲む〟ことを表す語、‘ku riyen～kürigen’の、‘kürï’、又、通古斯諸語における、〝囲い〟を表す語、例えば、Ev。‘kure’、Oroko。‘kurei～kureyi’、Lam。‘kure’、Neg。‘kuri’Ma。‘kuran～kuren’等の接頭語、‘kur’系とは、音義両面において、酷似している。

一方、中国の歴史書である、‘魏書東夷伝高句麗条に、

〝溝婁者句麗名城也〟

と記録されてある。つまり、〝溝婁（kuru）は、城なり〟であろう。それで、学者によっては、これを、満洲語の、‘gurun’（国）に比定されることもあり、日本語の、‘kofori（郡）に、或いは、韓国語の、‘keǒr’（郡）にも比定している。

又、一方、上古漢語（或いは、東夷語か）においても、〝囲い〟を表す語を調べて見ると、次のような言葉がある。

上古漢語の分類法に従って分類すると、先ず、陰類に、

①。回:gwer（K・Ch）Ch:周法高。以下同じ。
②。囗ɦiuer（A）A:藤堂明保。以下同じ。
陽類に、
①。郡:giwen（T・K）
②。圏:kiwen（T）
入類に、
①。国:kwek（T・K）kuek（A）

のような言葉がある。ここで、陰類の言葉を、ちょっと、考えて見よう。〃回〃は、小さい囲いの外側に、大きい囲いを描いた象形文字である。K。と、T。は、この〃回〃の上古音を、'gwer'と再構している。これは、正に、日本語の'kuru'とか、'guru'、或いは、韓国語の'kurï'に酷似されているのが見られる一方、通古斯語諸語の'kur'系の諸語とも相似ている。

又、〃囗〃は、〃囲い〃そのものを表す象形文字である。それと、A。の再構音が、ɦiuerになっているが、喉頭音である、頭子音、'ɦ'は、その響きが、軟口蓋音の'g'或は、'w'と似ている点らを考慮すると、このɦiuerも、〃回〃の音、'gwer'に近い音韻であろうことが伺われる。

次に、陽類の〝郡〟であるが、この文字は、君主（君）が、〝四方に巡って、民衆に号令する〟と言う意味を表していることで、一種の〝巡り（圓）〟を意味し、これに、〝おおざと（邑）〟が加わって、或る〝円形の区画〟を表している。又、〝軍〟は、〝外側〟を取り巻く、〝（とりまく）〟＋〝車〟の会意文字であるが、古代の戦争は、車で、圓陣を成すのが一般のやりかたで、〝軍〟は、〝圓陣〟を表していることがわかる。例えば、〝量〟が、薄曇った日の太陽と月のまわりの〝円線〟を表していることからも、その意味を伺うことができるであろう。

次に、入類の〝国〟と言う字であるが、〝国〟は、或る〝囲い（□：区画）〟を、〝ほこ（戈）で守る領域〟と言うことを表しているので、これも、〝圓形（区画）〟を表している。

以上の、上古漢語（或いは、東夷語か）の、各類における、〝囲い（圓形）〟を表す語を調べて見たが、陰類の〝回：gwer〟、〝□：güer〟が、前述の、諸言語が表す、'kur'系と、その音義が、ほぼ、似ているように見える。結局、この'囲い・回転'を表す、'kur'を語幹とする、この言葉は、黄河下流地帯から満洲、朝鮮半島、日本列島に至るまで、幅広く、使われていることがわかるであろう。

では、一体、〝囲い・回転〟を表す、'kur'系の、このような言葉の根元は、ど

ちらの言語であろうか。今のところ、この問題の解答は、難しいことと思われるが、それはともかく、このような現象は、大まかに言うと、人類の移動と、それに伴う接触に因って拡がる、一般的な現象と言えよう。

筆者の推測では、特に、日本語の中には、この'kur'系のような単語が数多く潜められていると思う一方、このような単語を考察する文献資料としては、何よりも、甲骨文字、或いは、上古漢語の諸資料であろうと信じる。

この問題の発展については、今後の研究に任せるべきであるが、ここで、確認しておきたいことは、魏書東夷伝の'高句麗条'である。

〝溝婁者句麗名城也〟つまり、高句麗語で、〝溝婁は、城〟と名乗るなり。の〝城〟は、一体、何を指しているのであろうか。

歴史、考古学の考察によると、昔の大陸の城は、日本の城の如く、建築物ではなくて、主に、山城である。敵の来襲をよりよく防ぐための、天然的な地域を選んで、そこに地所を作り、政治を司りながら、国民を保護すると言う、このように、政治的、地域的中心地になっているのが、一般的な城の模様である。従って、高句麗語の、この〝溝婁〟と言う〝城〟は、かなり広範囲の地域を指していると思われ、つまるところ、'kuru（溝婁）'は、一種の広範囲の〝囲い〟を表してい

ると推測される。

このように解釈する場合、高句麗語の〝溝婁（kuru）〟と言う言葉は、日本語の〝囲い〟を表す‘kuru-wa（廓）’の‘kuru’と、何か、親近関係があるように推測されるのであるが、明解は、今後の考察に期待して見ることであろう。

＊＊＊ 発表を終えて ＊＊＊

今回の発表会で、筆者を感動させたふたつの事実がある。それらを紹介すると、先ず、予想以外の聴衆数と、このフォーラムにおける聴衆の熱意であり、もう一つは、筆者の論文をまとめた〝原始韓日語研究〟（東国大出版部刊）という筆者の本を或る聴衆のひとりがお持ちになって、筆者の発表を聴講しているその熱心さである。

今日の学界では、日本語の起源に関する研究は、停滞されたまま、途方にくれている状態であるに反し、日本の国民のあいだには、日本に関する根源の問題について、多大の関心を持っていると言われている。発表後、さっそく筆者の本をお持ちの方と話を交わして始めてわかったのであるが、その方は、旅館を経営している方であった。しかしながら、韓国語及び、漢字に関する学問的知識のレベルは相当であることが話を交わしている中で気づかれた。

日文研のこのようなフォーラムを先頭に、今後の日本文化に関する研究は、実に、希望に溢れるであろうと思われる。それはこのたびの発表を終えて始めて感じた率直な筆者の感想である。

辛容泰

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ（ピサ大学助教授） Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン（日文研客員助教授） Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン（大阪大学助手） Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ（日文研客員教授） Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋　彙七（慶北大学校師範大学副教授） SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト（ウィーン大学教授） Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び－拳を中心に－」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア（テキサス大学助教授） Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像－現実と幻想－」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ（オベリン大学助教授） James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性－恵信尼の書簡－」

⑨	元. 2.14 (1989)	厳　安生（北京外国語学院日本語学部助教授） YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉　敬文（遼寧大学日本研究所副所長） LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ（オベリン大学助教授） Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏　剛（京都工芸繊維大学助教授） HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント（東洋大学助教授） Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
14	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ（ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授） KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
15	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO.ローターモンド（フランス国立高等研究院教授） Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪　向榮（中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授） WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
17	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント（ミネソタ大学助教授） Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ（フランス国立科学研究所助教授） Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
19	2．1．9 (1990)	スミエ・ジョーンズ（インディアナ大学準教授） Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2．2.13 (1990)	カール・ベッカー（筑波大学哲学思想学系外国人教師） Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2．4.10 (1990)	グラント K．グッドマン（カンザス大学教授・日文研客員教授） Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2．5．8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ（スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授） Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2．6.12 (1990)	リヴィア・モネ（ミネソタ州立大学助教授） Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2．7.10 (1990)	李　国棟（北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師） LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
25	2．9.11 (1990)	馬　興国（遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授） MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
26	2.10．9 (1990)	ケネス・クラフト（リハイ大学助教授） Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ（カイロ大学講師） Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較」
㉘	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ（カレル大学日本学科長・日文研客員助教授） Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン（ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員） Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト（ワーゲニンゲン大学研究員） Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
㉛	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ（ワルシャワ大学教授・日文研客員教授） Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー（オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授） Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
㉝	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ（ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授） Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント（フンボルト大学教授・日文研客員教授） Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鴎外記念館」

35	3．9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス（琉球大学助教授） Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
36	3.10. 8 (1991)	王　暁平（天津師範大学助教授・日文研客員助教授） WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
㊲	3.11.12 (1991)	辛　容泰（東国大学校文科大学教授•日文研来訪研究員） SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語•韓国語•甲骨文字との脈絡を探る－」
38	3.12.10 (1991)	洪　潤植（東国大学校教授） HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」

○は報告書既刊

発 行 日　1992年9月10日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048

問 合 先　国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

＊＊＊

©1992　国際日本文化研究センター

■ 日時

1991年11月12日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部